

「それじゃあみんな、今日も来てくれてありがとね～、おやすみ～」

画面の先の視聴者に向けてとびきりの笑顔を作りそう言って俺はライブ配信を終わらせた。
スマホの画面を閉じて若干強張っていた身体を解すよう伸びをする。

「ふ～、今日も結構来てくれたな～」

片桐祐一、25歳。

俺は現在『ゆいちー』という名前で、週に一回金曜日にライブ配信の副業をしている。

チャンネル登録者は5万人と、なかなかの人数を誇る俺は『可愛すぎる女装男子』というキャッチコピーで人気を博している。

可愛い女の子の服を着て、ウィッグをつけて、メイクもバッチリきめればもうスマホの前にいるのは10代の美少女にしか見えなかった。

声はまんま地声なので男のものだし、喉仏も出てるしでそこら辺はちゃんと“男”って感じなんだけど、そのギャップがイイとの評判だ。

配信内容は様々でファッションやコスメなどのオススメアイテムの紹介やゲーム実況、それにただの雑談等々。もう何十回と配信してるけどその中で一つだけルールを

自分の中で決めている。

それは絶対に素顔を晒さない事。

自分のメイクのやり方も配信した事あるけどその時も完璧にメイクした状態だった。

当然わかりにくいと女性視聴者から不評だったけど、俺のファンは男女比 8:2 と圧倒的に男が多く、メイクなんかに興味ない者が多数なのであまり気にしない。

因みに配信者にとって肝心な“お金”を落としてくれるのも、俺の場合圧倒的に男性だったりする。

(今日も『らぶさん』来てくれたな……しかもまた〇万のギフト……は～、いつもいつもありがとうございます……)

中でもアカウント名『ゆいちーらぶ』さんー通称らぶさんは、配信が始まれば真っ先に最高額の“ギフト”を贈ってくれる超お得意様である。

俺のライブ収入の3分の1はらぶさんからの贈り物だった。

何故か配信を始めた初期の頃から俺の事を気に入ってくれたようで、以来ずっとー何十回とやってるライブ配信で、毎回毎回システム上最高額を贈ってくれていた。その総額を思うと大変ありがたく思うと同時に若干の恐ろしさもある。

しかし最初の頃は女装してる男って事でアンチも多かったから、彼がいなければ俺はライブ配信を辞めていたか

もしれない。

そういう意味でもらぶさんには感謝していた。

（まあ……一つだけ不満を言わせてもらえば……名前……変えてくれないかなあ……）

『ゆいちーらぶ』……………名前からも彼の俺に対する熱量がひしひしと伝わってくる。

おそらくだが……この人、他のライバーの配信とかは見
る気もないんだろうな……なんかもう……そんな風に思
わせる名前だった。

ゆいちーらぶと名前を読み上げるのは流石に恥ずかしい
ので、投げ銭のお礼を言う時も俺はらぶさんと呼んでい
る。

最初にそう呼んだ時に愛称みたいで嬉しいとあちらも喜
んでいたの、それで定着し今に至る。

「……………よし、メイク落としも終了〜っと」

ふわふわフリルの付いた服を脱ぎ、ウィッグを外し、メ
イクを落とせば何処にでもいるような平凡顔の男が鏡に
映っていた。

この顔がメイクであんな美少女顔になるんだから、自分
でやってる事ながら不思議に思う。

自分でも別人にしか見えないこのメイク技術のおかげ
で、今のところ家族友人同僚誰一人として俺が女装して

配信活動してるなんて気付いた様子はない。

万が一『ゆいちー』の事を知ってる視聴者に出会っても、たとえ真正面からまじまじと顔を見られようとも、俺がゆいちー本人であると分かる人はおそらく誰もいないだろう。

それはきっとゆいちーの一番のファンであるらぶさんでも変わらない。

おかげで俺は誰に気兼ねする事なく、趣味の女装で可愛いと褒められ承認欲求を満たされる上、少なくないお金まで頂けるのだからありがたい話だ。

「さ～て、飲みに行くぞ～」

そして俺は頑張った自分へのご褒美として頂いたお金で大好きなお酒を飲みに行く。

普段は自宅で安めのを買って飲んでるけど、週に一回配信を終えた時にだけ店でお高めなお酒を好きなだけ飲むのだ。

それを出来るのもらぶさんのおかげといっても過言ではない。

本業の仕事の給料は生活費と貯蓄に全て回している。

ライブ配信の収入は女装用の服やコスメ代、あとは実家への仕送りもあるので、らぶさんがいなければこんな贅沢をする余裕はなかった。

「今日もご馳走様で～す」

きつとらぶさんはゆいちーの事を女装が好きな美少年だと思って貢いでくれてるのだろう。だけど実際には 20 半ばの平凡な男の酒代に消えてるのだからまったく哀れでならない。

俺に出来る事と言えば彼に感謝して高いお酒を楽しむ事だけだった。

「さて、今日はどこで飲むかなあ」

近場の店は行き尽くしたから、たまには少し足を延ばして料理も酒も美味しいと評判のバーにでも行ってみようかと地図アプリを開く。

因みに配信終わりに飲みに行く時は友人を誘うという選択肢はなくいつも一人だった。

別に誰かと飲むのが嫌という訳ではなく、高い酒ばかり頼んでたらその金はどうしたと怪しまれるからだ。

お金も視線も気にする事なく美味しいお酒をゆっくり飲みたい——そんな思いで目的の店の名前をアプリに入力

した時だった。

「ゆっ、ゆいちー！！！？？」

「……………へ？」

思わず声の方を振り向いてしまった。

そこには高そうなスーツを着た俺より少し年上っぽい、どえらいハンサムな男性が立っていた。

10人中10人の女性が振り返りそうなハンサムさんは、その整った顔を紅潮させ、明らかに興奮した顔つきで俺の方をガン見していた。

「あ……あの……………？」

聞き間違いかなと思った。

大きな声でハッキリと、俺に向けて「ゆいちー」と叫んだけど、たぶん聞き間違いだろうと思った。

だって俺がゆいちーだと分かる訳がない。

服はシャツにスラックスにジャケットを羽織ったごく普通の格好。ウィッグもなし、メイクも落としたすっぴんの俺は、10人中10人が顔を忘れそうな平凡な男でしかないのだ。

『可愛すぎる女装男子・ゆいちー』だと、気付く訳がない。

けどー

「やっぱりその声！！ ゆいちーだ！！ まさかこんな所でゆいちーに会えるなんて！！」

(……………声？ 俺、今 3.4 文字くらいしか発声してないよな……??)

確かにライブ配信は地声でやってるけど、今のボソツとした喋りだけでどうして確信が持てたのだろうか？

「あの……たぶん人違いかと……………」
おそらくは俺のフォロワーなのだろうけど、ここは無難に否定しておく事にした。
声云々は置いといてどうして俺がゆいちーだと気付いたのかは分からないけど、お互いの為にも正体なんか知られない方がいい。
こんな平凡男がゆいちーなんて夢を壊すだけ。否定しておけばすぐに納得するだろうーそう思った。

「そんな！ 僕がゆいちーを見間違える訳ないでしょ！
その声、鼻筋、耳の形、顔の輪郭に喉仏、手の形に爪の形、肩幅に腰の細さ！お尻の小ささ！ 何十回……いや録画していつも見返してるからもう何千回と君の動画を観てるんだ！ 僕がゆいちーを見間違える筈がない！！」

「ヒエッ」

思わず悲鳴が漏れてしまった。

いずれもメイクでは隠しきれない（腰や尻はよく分からない）部分ではあるけれど、そんな僅かなヒントで特定するなんてどれだけ熱心に見てるのか。

しかも現在夜の 10 時で、街灯や店の明かりがあるとはいえ周囲は暗い。

こんな場所で耳の形とか爪の形とか……ヤバすぎて執念じみたものを感じた。

（……まさか……いや、そんな……まさか、そんな偶然……）

高そうなスーツ、高そうな革靴、袖から覗く腕時計もセンス良く、こちらは大変お値段が張りそうだ。

明らかに財力をお持ちの人種である。

お金持ちでしかも、すっぴん状態の俺を一目でゆいちーだに見破ったその熱量……

（あり得ない……ってかいくら『あの人』でも俺に気付くなんてこと……）

「はっ……ご、ごめんね、大きな声出して……その、怖がらせるつもりは……」

ドン引いてしまった俺を彼は怖がっていると勘違いしたようだ。（いや勘違いでもない。怖い）

謝る彼に俺は手を振った。

「あ、いえ……あっと、でも、その、夜だし周りに人も
いるので声は抑えていただけると……」

「あっ、そ、そうだ……そうだね、ごめん、つい……ゆ
いちーに会えた感動で興奮しちゃって……」

どうやら悪い人ではないらしい。

「……あ～、その……俺はゆいちーって人では……」

「ああそっか、こっちの正体が分からなかったらそりゃ
怖いよね？ えっと、僕、『ゆいちーらぶ』って名前の君
のフォロワーなんだけど……分かるかな？ 一応ライブ
には毎回お邪魔してるし、たまにコメントもしてるんだ
けど……」

(はいビンゴ————！！！)

この人こそが俺に毎回〇万円を貢いでくれるゆいちーら
ぶさんだった。

まさからぶさんがこんなにも背も高くスマートなイケメ
ンだったとは……勝手に美少年趣味のぽっちゃり太った
メガネおじさんを想像してた事を心の内で土下座した。

「らぶさん……でしたか……」

「！！ その呼び方……っ」

「ごめんなさい、知らないフリして……えっと、いつも
応援してくれてありがとうございます」

「ゆっ、ゆいちー……………ツツ！！！」

感極まった様子の彼に俺は精一杯の営業スマイルを向けた。

本当は最後までバックれたかったけど、それをやって心象を悪くして、万が一『ゆいちー』から離れでもしたら最悪だ。

俺の一週間に一度の楽しみが無くなってしまう。

ここは全力でファンサする方向に切り替えた。

(まあ……バレたら幻滅するだろってんで隠そうとしただけだし……でもなんか……そんな心配なさそうだし……)

「は〜〜〜、素顔のゆいちーも可愛い♡ つぶらな瞳、ちっちゃい唇、まんまるな頭、全部可愛いよ〜〜♡♡ メイクしたお顔も凄く可愛いけど、素顔もとっても素敵だねえ」

「え？ あ、えっ……と……………ありがとう……ございます……？」

(マジかこの人)

どうやらこの十人並の平凡顔も『ゆいちー』同様気に入っていただけたようだ。美的感覚とかどうなってるんだろう。

「いつもの可愛いスカートもとっても似合ってた素敵だけど、あれロングスカートだから足があんまり見えないんだよねえ。でもそのスキニーパンツはゆいちーの足の細さがわかって……すごく……ハア、ハア……ハア、ハア……すごく、イイね……フ～、フ～」

「ヒエッ」

イケメンが興奮した様子で俺の足をガン見してくるものだから思いっきり身の危険を感じた。
これはもう逃げた方がいいのではないだろうか……でも
〇万円が……お酒代が……

「ああごめんごめん、初めて見る格好についてテンションが上がっちゃって……べ、別に、イヤラシイ目でなんか見てないヨ……？」

「そ、そうすか……」

イケメンが態とらしく顔を背け、そう言いつつ俺の足をチラッチラツと見ている。
色々と残念な光景だった。
そんな残念なイケメンがこちらの反応を伺いつつ恐る恐る口を開く。

「あの……怖がらせてしまったお詫びにお酒でもどうか

な？ 是非奢らせてほしいんだけど……あ、ゆいちももう成人してる？ お酒は飲める？」

「あ、はい、大好きです」

年齢は非公開でやってたのについ即答してしまった。って言うかここは絶対に断らなければいけない場面だった筈だ。

「すみません、お酒は飲めなくて……」とでも言っておけばまだ逃げ道はあったのに……

“酒”という単語についつい口が勝手に動いてしまった。

「よかった、僕この近くのホテルに泊まってるんだけど、そこにバーラウンジがあるんだ。結構お酒の種類があって、カクテルの他にいいワインとかも置いてるんだけど……ワインは好きかな？」

「大好きです」

条件反射のように答えてしまった。

ビールも焼酎も日本酒も何でも飲む。当然ワインだって例外ではない。

しかもホテルのバーなんて、如何にも高級感わ漂わせる場所に出されるワインなんて、どんな味なのか想像もつかない。

(い、行きたい……らぶさんみたいなお金持ちがいいワインって言う程のワイン……是非飲んでみたい……で、でも、大丈夫なのか……？ ホテルのバーなんて如何にもアレな所……ついて行ってホントに大丈夫なのか……？)

らぶさんの頭一つ分程上にある顔を見上げる。
彼の方も顔を赤らめ若干鼻息をフンフンさせながらこちらを見下ろしていた。
ただのオッサンなら許されない表情であっても、彼のよ
うなイケメンなら充分鑑賞できる顔面だった。

「……………」

(大丈夫……だよな……“ゆいちー”みたいな見た目可愛い男の娘なら兎も角、“俺”相手にそんな……ない……よな……？)

「あの……飲むだけ……ですよね……？」

「もちろん飲むだけだよ」

「他にはとくに……何もないですよね……？」

「なにもナイヨー」

「何もしない……ですよね……？」

「シないシない。ナニもシナイヨー」

「……………本当に？」

「ホントーダヨ。ボクヲシンジテ」

「……………えと……じゃあ……お言葉に甘えてご馳走になります」

じゅぷ♡ じゅぷ♡ じゅぷ♡ じゅぷ♡ じゅぷ♡ じゅ
ぷ♡ じゅぷ♡ じゅぷ♡ じゅぷ♡

「あっあっあっあっあっ♡ ～～っう、うそつき♡
なにもしないって、言ったくせに♡ い♡ あひんっ♡
♡」

「やだなあゆいちーってば♡ 自分で言うのもなんだけ
どあんなバレバレな嘘信じたんだ？可愛いねえ。あんな
の口だけに決まってるでしょ」

「ひっ、ひどい……あんっ♡ っ、バカッ、もお抜け、
抜けって、ん♡ひッ♡♡ あっあっあっあっ～～～
～ッ♡♡」

らぶさんに連れてこられたのはこの辺りでも有名な高級
ホテルだった。

そちらのバーでお勧めされたワインは本当に美味しく、
好きなだけ飲んでいいと言われた俺は本当に遠慮なく飲
んでしまった。

聞いた事のない名前のワインを飲んだり、バーテンダー
さんにカクテルを作ってもらったりと、存分に高級なお
酒を味わった俺は2時間でももの見事に酔っ払ってし
まった。

へ口へ口になった身体をらぶさんに支えてもらい、俺は
ホテルの最上階——彼の泊まっている部屋にあっさり連
れ込まれたのだった。

じゅぶ♡ じゅぶ♡ じゅぶ♡ じゅぶ♡ じゅぶ♡ じゅ
ぶ♡ じゅぶ♡ じゅぶ♡ じゅぶ♡

「おぐっ♡ おっおっおひッ♡♡ おッ♡ ツやめ、も、
やっ……あぁっ♡ んひッ♡ おっおっやっあっ、
あひいいッ♡♡」

広々としたベッドに押し倒された俺は現在素っ裸の状態
で尻の中に指を挿れられている。

そんな所に何かを挿れるなんて絶対に痛いし苦しいと
思ってたのに、中の壁を擦られたり奥をずんずん突かれ
たり……いじくられるのが何故か気持ちよくてたまらな
かった。

「可愛いねえ♡ お尻の中そんなに気持ちいいんだ？
ほらほらゆいちー、お尻じゅぷじゅぷ言ってるよ。おま
んこみたいに濡れててとってもエッチだねえ♡」
「ひぐっ♡ っちがッ……き、気持ちよくなんか……
おほッ♡♡ ～～やめ……おッおッ♡♡ ひんっ
♡ しょこ、なに……？ んひッ♡♡ お♡ らめ……
しょこ、ぐりぐりしにやいでえ……ッお、お～～～
～～ッ♡♡♡」